

はしがき―課題と構成、立場と方法など 7

序章 東アジア近代の知的システムを問う 19

- 一、「近代」を問いなおす 19
- 三、概念編成史の方へ 27
- 五、文化諸制度の総体を問う 33

第一章 「日本文学」とは何か 36

- 一、中国の伝統概念と新概念 36
- 三、ふたつの「文学」 42
- 五、最初の「文学」 50
- 七、なぜ、明治期まで「日本文学」は成立しなかったのか 57
- 九、なぜ、日本では言語芸術の概念が受け入れられたのか 68
- 一一、宗教をよくむ「人文学」 76
- 一三、民衆文芸の位置 84

第二章 「芸術」の近代的再編 88

- 一、ふたつの「純文学」 88
- 三、「純文学」対「大衆文学」 95
- 五、「天理」の分解 102
- 七、「芸術」の再編 109
- 九、「美術」の定着 116
- 一一、生命主義の渦 121

- 二、日本近代の知的システムの特異性 21
- 四、古典評価史再考 31

- 二、新「文学」のカテゴリー 39
- 四、「Literature」と「文学」の出会い 45
- 六、最初の「日本文学」 53
- 八、なぜ、江戸時代に近代的な「文学」が成立していたと論じられたのか 63
- 一〇、日本の「人文学」―ヨーロッパとの三つのちがひ 74
- 一二、バイリンガルの「人文学」 80

- 二、明治期の「純文学」 90
- 四、「理学」と「哲学」 99
- 六、「文学」の広義と狭義 104
- 八、「美術」の登場 112
- 一〇、ふたつのロマン主義 118
- 一二、「芸術」の近代的価値 124

一三、伝統的な「美」とは？ 127

第三章 近代化主義の迷妄から抜け出る 136

- 一、「舊文一致」と「写生」 136
- 三、近代化主義の迷妄 148
- 五、文化構造論の落とし穴 164
- 七、リアリズム基準を解体する 175

一四、「芸術」と「人文学」の概念を転換する 131

- 二、「情景」の成立 141
- 四、「写実」の行方 156
- 六、音読と黙読について 172
- 八、分析スキームを再編する 177

第四章 文学改良と古典評価―その結びつき 187

- 一、国民文学としての「万葉集」 187
- 三、戯作改良 200
- 五、ロマンティズムとリアリズム 206
- 七、脚本と劇評の改良 211
- 九、「万葉集」と「源氏物語」評価の組み替え 220

第五章 北村透谷の「文学」観―宗教と芸術のあいだ 226

- 一、なぜ、透谷の「文学」観をとりあげるのか 226
- 三、考察―美と宗教と 250

第六章 幸田露伴の「美術」観―「風流伝」再考 259

- 一、最初期露伴を読みなおす 259
- 三、ストーリー 271

- 二、透谷における「文学」の用法の変遷 232

- 二、「風流伝」発端―「如是我聞」 264
- 四、「風流伝」の近代性 279

第七章 明治期「言文一致」と「写生」—子規、独歩、蘆花 285

- 一、明治期「言文一致」神話 285
- 三、明治期の「国語」改良論とその後 290
- 五、「言文一致」は庶民から—「ホトトギス」専集日記をめぐって 300
- 七、世紀転換期の「言文一致」 335
- 二、ヨーロッパの俗語革命と中国、日本における読み書き言葉 286
- 四、「言文一致体」—その論と実際 294
- 六、近代以前の「言文一致」体—「た」の性格 330

第八章 象徴主義へ 343

- 一、日本の古典芸術とロマン主義芸術 343
- 三、象徴の価値転換 354
- 五、「新古今和歌集」の表現論 361
- 七、ロマン主義から象徴主義へ 366
- 九、日本象徴詩の成立と古典評価 374
- 一、一、「自然主義」の終焉 389
- 二、セルフ・オリエンタリズム 351
- 四、中世美学は、いつ成立したのか 358
- 六、ヨーロッパ象徴主義の導入 364
- 八、情調的象徴主義 369
- 一〇、象徴主義受容—島村抱月の場合 383

第九章 「歴史」の歴史 394

- 一、「歴史」概念の組み替え 394
- 三、近代以前の歴史叙述 400
- 五、現代史の季節へ—久米邦武再考 425
- 二、「史」と「歴史」 397
- 四、明治期における歴史概念の再編成 414
- 六、日本の歴史叙述の特徴 436

あとがき 441

註 445

人名・作品名索引 492

事項索引 508

「日本文学」の成立